

いっしょに



核家族が増え、子どもたちが「人の死」を
 実感する機会は乏しくなった。死を理解する
 ことは命の大切さを知ること。子どもたち
 に、「死の意味をどう伝えればいいか」。小児
 がんで六歳の長女を亡くした体験をもとに
 「いのちの教育」を続けている鈴木中人さん
 (五)＝愛知県豊田市、いのちをバトンタッチ
 する会代表につかかった。(安藤明夫)

死の意味を伝える

「子どもたちが「死」
 を実感できていないと感
 じますか。」

命の授業で小中学校に
 出掛けると、「死体に触
 ったことはありませんか」
 と尋ねます。手を挙げる
 子は小学生で5%くら
 い、中学生で20%くら
 いでしょうか。命や死を考
 えるとき、リアルな感覚
 はとても大事ですが、そ
 れが難しい環境にある。
 人の死という、棺の中
 の顔しか浮かばない若い
 人も多いでしょうね。
 そして「人が死んだら

悲しむ姿から学ぶ

手を合わせる習慣教えたい

身近におじいちゃん、お
 ばあちゃんがいなくて、
 八割は病院で亡くなる時
 代。無理もないことかも
 冷たくなった体に触らせ



秋葉原連続殺傷事件の現場で追悼する若者たち。子どもたちに「命の大切さ」を伝えていくことが、悲惨な事件を防ぐ力になるはず

しれません。
 「そんな時代に、どう
 やって「命の大切さ」を伝
 えればいいのか」
 授業の感想で「祖母が
 亡くなったときに、両親
 がすごく悲しんでいた」
 「お父さんが涙を流すの
 を初めて見た」と体験を
 書いてくれる子もいま
 ず。死は、すくすくしらへ

ない大切な命を学んでい
 きます。

「死は怖いこと、考え
 たくないこと、という反
 応もありますよね。」

私たち大人も、子ども
 のころ、死の意味を考え
 て怖くなった時期があっ
 たはず。でも人生体験を
 積む中で、私たちは一人
 の力で生きているのでは
 なく「生かされている」と
 思うようになるのでは。
 それを子どもたちに、ど
 う植え付けていくか。

日常生活で「手を合わ
 せる習慣」って大切だと
 思っています。「いただき
 ます」は、肉や野菜の命
 を頂いて生きていることへ
 の感謝。お墓参りは、先
 祖への「ありがとう」。
 初詣では「みんなが幸せ
 になるようにお祈りしよ
 うね」。そんなふうにし
 めるようになるのでは。

宗教的な生活をしろと
 いうのではなく、生活の
 中に死も祈りもなくなっ
 てしまったら、自分しか
 残りません。手を合わせ
 る姿を親が子どもに見せ
 て、その思いを伝えてあ
 げていきたい。



鈴木 中人さん